

原著

現代青年における意思決定スタイルの検討 —主体性・被影響性尺度の再構成から—

岩渕 将士*

Decision-Making Styles in Contemporary Adolescents: Revising the Autonomy and Influenceability Scale

Iwabuchi Masashi

Abstract

The purpose of this study was to revise from the autonomy and influenceability scale to the decision-making style scale to measure autonomous, dependent, and irresponsible decision-making styles, which were characteristic of contemporary adolescents. The participants, 250 undergraduates in Study 1 and 165 undergraduates in Study 2, completed a questionnaire survey. Exploratory factor analysis in Study 1 yielded a structure with three factors, "Autonomous Decision," "Opposite Avoidance," and "Superficial Compliance," that shows acceptable internal consistency. Exploratory and confirmatory factor analysis in Study 2 confirmed the reproducibility of the three-factor structure. Also, the expected relationships between decision-making styles and independent and interdependent construal self, regulatory focus, and self-esteem were shown. The results suggest that Autonomous Decision, Opposite Avoidance, and Superficial Compliance have features of autonomous, dependent, and irresponsible decision-making styles, respectively. However, the limitation that Superficial Compliance had each feature of irresponsible and dependent styles remained.

Keywords: decision-making style, contemporary adolescents, adolescence

問題と目的

意思決定スタイル 意思決定は日々の生活の中で頻繁に迫られる認知的活動であり、意思決定に影響を及ぼす個人の特性として意思決定スタイルが挙げられる。意思決定スタイルは「意思決定に特定の方法で反応するための習慣に基づく傾向」(Hamilton, Shih, & Mohammed, 2016)と定義され、複数の下位スタイルから構成される (Scott & Bruce, 1995)。中でも、種々の情報の比較検討を基に意思決定する傾向である合理的スタイル、経

験に基づき短時間で意思決定する傾向である直観的スタイル、意思決定を可能な限り先延ばししようとする傾向である回避的スタイルの3側面が、意思決定スタイル研究で中心的に議論されてきた (Hamilton et al., 2016)。また、意思決定スタイルは自己統制や健康リスク行動と関連することから (Baiocco, Laghi, & D'Alessio, 2009; Bavolar & Bacikova-Sleskova, 2018; Scott & Bruce, 1995)、心理的支援の際に意思決定スタイルに着目することには意義があると言えよう。

青年期における意思決定スタイル 青年期前期

* 東北大学大学院理学研究科 (Graduate School of Science, Tohoku University)
受領 2020.5.24 受理 2021.12.28

から後期にかけて複雑な情報処理を必要とする合理的スタイルが向上し、認知的負荷の小さい直観的スタイルや回避的スタイルが低下する (Baiocco et al., 2009; Filippello, Sorrenti, Cuzzocrea, Nuzzaci, & Larcana, 2014)。これらの知見から、青年期は意思決定スタイルが変化しやすい時期と考えられる。

青年期の意思決定スタイルを説明する理論の1つに意思決定の葛藤理論 (Janis & Mann, 1977; 以下、葛藤理論とする)がある。Janis & Mann (1977)は意思決定の際に生じる葛藤への対処方略によって意思決定スタイルを整理した。そして、意思決定に伴う葛藤を無視して惰性的に意思決定する「現状維持 (Unconflicted inertia)」, 意思決定の「先延ばし (Procrastinating)」, 周囲の意向に追従して意思決定する「責任転嫁 (Back-passing)」, 衝動的に意思決定する「短慮 (Hypervigilance)」といった不適応的な意思決定スタイルに対して、様々な情報を合理的に検討した上で意思決定する「熟慮 (Vigilance)」が唯一の適応的な意思決定スタイルと位置付けられた。

同じく青年期の意思決定スタイルについて理論化した Johnson (1978)は、多くの情報を基に意思決定する「体系的 (Systematic)スタイル」と少ない情報を基に意思決定する「即時的 (Spontaneous)スタイル」, 内的基準を基に意思決定する「内的 (Internal)スタイル」と外的基準を基に意思決定する「外的 (External)スタイル」の計4側面から意思決定スタイルを捉えた (Johnson, 1978)。

そして、Janis & Mann (1977)や Johnson (1978)を始めとする意思決定スタイル理論を基に、個人の全般的な意思決定スタイルの測定を試みた尺度が General Decision-Making Style (GDMS, Scott & Bruce, 1995)である。Scott & Bruce (1995)は様々な属性を持つ対象者に調査を行い、「合理的 (Rational)」, 「直観的 (Intuitive)」, 「依存

(Dependent)」, 「回避的 (Avoidant)」, 「即時的 (Spontaneous)」の5スタイルから GDMS を構成した。合理的スタイルは様々な情報を比較・検討する点で「熟慮」(Janis & Mann, 1977)や「体系的スタイル」(Johnson, 1978)と、直観的スタイルは過去の経験に基づき、短時間で意思決定に至る点で「即時的スタイル」(Johnson, 1978)と、依存的风格は意思決定に他者の意見を反映させる点で「責任転嫁」(Janis & Mann, 1977)と、回避的スタイルは意思決定を回避しようとする点で「先延ばし」(Janis & Mann, 1977)と、即時的スタイルは衝動的に意思決定に至る点で「短慮」(Janis & Mann, 1977)と類似する意思決定スタイルである。GDMSはパーソナリティや刺激欲求といった多様な指標と関連が示されており (Baiocco et al., 2009; Wood & Highhouse, 2014), 意思決定スタイル研究の代表的な測定尺度の1つと言える。

しかし、GDMSは様々な意思決定スタイル理論に共通する要素から構成されたため、GDMSに含まれない各理論独自の意思決定スタイルもある。例えば、「内的スタイル」(Johnson, 1978)のような内的基準を基に意思決定する自発的スタイルや、葛藤理論 (Janis & Mann, 1977)の「現状維持」のような深く考えずに意思決定する惰性的スタイルはGDMSでは測定できない。しかし、これらの意思決定スタイルは、自己と他者を比較しながら自分らしさを模索する青年期 (溝上, 2008)の認知的基盤と考えられるため、これらの機能やその変化に関する知見を蓄積することは青年期の心理的支援に寄与すると考えられる。

現代青年における意思決定スタイル 青年期はアイデンティティの達成に向かう時期であり、種々の社会的実験を通して現代青年は自律的な自己を形成していく (Erikson, 1968; 溝上, 2008)。特に成人期への移行期に当たる大学生には、コミュニケーション能力のような汎用的なスキルだけでなく、学際的に知識や技能を組み合わせる高

度な実践力の獲得が期待されている（中央教育審議会, 2018）。こうした自律性や高度な実践力は自発的に社会的活動に挑戦する中で形成されるため（Erikson, 1968）、青年期において内的基準を基に意思決定する自発的スタイルの形成を支援することは重要であろう。

また、現代青年は友人関係において心理的に傷つけ合うことを回避しやすく（岡田, 2012）、周囲から排除されないために深く考えずに周囲の意向に同調しやすい（杉原, 2001）ことが指摘されている。友人関係において心理的に傷つけ合うことを回避する行動は友人の意向に追従した意思決定に基づくため（岡田, 2012）、意思決定スタイルの1つである依存的スタイルが回避行動の基盤にあると考えられる。依存的スタイルは刺激欲求やインターネット依存といった青年期に生じやすい問題と関連するため（Baiocco et al., 2009; Bavolar & Bacikova - Sleskova, 2018）、高い依存的スタイルは現代青年の社会不適応を助長する可能性がある。さらに、深く考えずに周囲に同調する行動（杉原, 2001）は意思決定スタイルの1つである惰性的スタイルに基づくものだが（Radford, Mann, Ohta, & Nakane, 1993）、このような同調行動はアイデンティティの探索を阻害することが指摘されている（杉原, 2001）。

以上より、現代青年を対象に自発的、依存的、惰性的スタイルの機能やその変化に寄与する要因を明らかにすることで、青年期の心理的支援モデルの構築に貢献できると期待される。しかし、意思決定スタイルの代表的な尺度であるGDMS（Scott & Bruce, 1995）ではこれら3スタイルを測定できないため、新たな測定方法の整備が求められる。

自発的、依存的、惰性的スタイルの測定尺度
個人の内的基準を基に意思決定する自発的スタイルの測定尺度として、Johnson（1978）の「内的スタイル」が挙げられる。「内的スタイル」は留学生

の異文化適応に寄与する社会適応的な意思決定スタイルだが（Kagan & Cohen, 1990）、内的整合性が低いという測定上の問題がある（Coscarelli, 1983）。

周囲の意向に追従して意思決定する依存的スタイルの測定尺度には、葛藤理論（Janis & Mann, 1977）を基にした「責任転嫁」（Mann, Burnett, Radford, & Ford, 1997）やGDMSの「依存的スタイル」（Scott & Bruce, 1995）があり、十分な信頼性や妥当性が検証されている。しかし、「責任転嫁」は意思決定の責任を放棄する手段として周囲に追従する傾向であり、現代青年の周囲から排除されないことを重視する特徴（岡田, 2012; 杉原, 2001）とは目的が異なる。また、「依存的スタイル」は重要な意思決定場面に限定して測定するため、日常の意思決定場面における依存的な意思決定スタイルを測定しているかは定かではない。

深く考えずに意思決定する惰性的スタイルの測定尺度には、葛藤理論（Janis & Mann, 1977）を基にした「自己満足（Complacency）」（Radford et al., 1993）がある。「自己満足」は深く考えずに現状維持や周囲への同調を選択する意思決定スタイルであり、自らの意思決定に対する自信の低さや意思決定に伴う心理的ストレスの強さと関連が示されている（Radford et al., 1993）。しかし、「自己満足」にも内的整合性が低いという測定上の問題がある（Radford et al., 1993）。

各尺度の項目内容から、自発的スタイルと惰性的スタイルにおける内的整合性の低さは、尺度内に複数の概念が混在するために生じたと考えられる。したがって、単一の概念を反映した尺度構成にすることで、この問題を解決できるだろう。また、既存の依存的スタイル尺度では現代青年の特徴に即した測定ができないため、青年期に焦点を当てた依存的な意思決定スタイル尺度を整備することには意義がある。そこで本研究では、信頼性と妥当性が検討され、他者との関係性から自己形

成に取り組む青年期の志向性を測定する主体性・被影響性尺度(岩城, 2012)を再構成することで、現代青年に即した意思決定スタイルの測定を試みる。その際、後述するように、主体性・被影響性尺度の「被影響性」には複数の概念が混在する可能性があるため、主に因子構造に焦点を当てる。

主体性・被影響性尺度の再構成 主体性・被影響性尺度(岩城, 2012)は小中学生を対象に作成された「主体性」と「被影響性」の2側面から構成される尺度である。「主体性」は個人の主体的・促進的な志向性を測定する尺度であり、「何か問題が起こったとき、自分で何とかする方法を考えようとする」といった項目から構成される(岩城, 2012)。これらの項目は個人の内的基準を基に意思決定する傾向を意味するため、自発的スタイルの指標として用いることは可能と判断した。なお、「主体性」には十分な内的整合性が示されているため(岩城, 2012)、既存の自発的スタイル尺度の内的整合性が低いという問題を解決できると考えられる。

「被影響性」は、自らの言動に対する周囲からの影響の受けやすさを測定する尺度であり、「自分で出したよい意見でも、周囲に反対されると、理由をよく調べないで、すぐ、取り消してしまう」、「何も考えず、つい、友人がやっていることの真似ばかりしようとする」といった項目から構成される(岩城, 2012)。これらの項目は現代青年の特徴(岡田, 2012)である傷つけ合うことを回避する意思決定に基づく点で共通する。しかし、前者は周囲の意向に追従する「責任転嫁」(Mann et al., 1997)と、後者は深く考えずに周囲に同調する「自己満足」(Radford et al., 1993)と類似するため、「被影響性」(岩城, 2012)には依存的スタイルと惰性的スタイルが混在すると言えよう。したがって、「被影響性」(岩城, 2012)の因子構造を再検討し、現代青年の特徴に即した依存的スタイルと惰性的スタイルの測定尺度として妥当性を有するか検証

することで、既存の依存的スタイル尺度や惰性的スタイル尺度の問題に対処できるだろう。

本研究の目的 本研究では主体性・被影響性尺度(岩城, 2012)を自発的、依存的、惰性的な意思決定スタイルの測定尺度として再構成し、信頼性と妥当性を検証することを目的とする。この目的を達成するため、因子構造及び内的整合性の検討と、基準関連妥当性の検討を行う。

原尺度(岩城, 2012)では「主体性」と「被影響性」の2因子構造であったが、「被影響性」には依存的スタイルと惰性的スタイルが混在すると考えられた。そこで、本研究では同一母集団から独立に2回の調査を行い(研究1, 研究2)、それぞれの調査対象者について2因子構造と3因子構造の比較をすることで、主体性・被影響性尺度の因子構造を再検討する。

また、採用された各因子の測定概念を明らかにするため、基準関連妥当性を検証する。基準関連妥当性の指標として、研究1では相互独立的一相互協調的自己観尺度(高田, 2000)を、研究2では促進予防焦点尺度邦訳版(尾崎・唐沢, 2011)と自尊感情尺度(山本・松井・山成, 1982)を用いる。1回の調査で多数の項目に回答を求めると調査対象者の負担が大きいため、妥当性の検討は2回に分けて実施する。

相互独立的自己観は自己の内的基準を重視する志向性であり、「周囲と異なっても自分の信じる場所を守り通す」といった項目から測定される(高田, 2000)。したがって、内的基準に基づく自発的スタイルを反映した「主体性」(岩城, 2012)は相互独立的自己観と正の関連が示されると予想される(仮説1)。

相互協調的自己観は他者の意向をくみ取ることを重視する志向性であり、「相手や状況で態度や行動を変える」といった項目から測定される(高田, 2000)。したがって、「被影響性」(岩城, 2012)の周囲の意向に追従する依存的側面は相互

協調的自己観と正の関連が示されるだろう（仮説2）。その一方で、「被影響性」（岩城, 2012）の深く考えずに周囲に同調する惰性的側面は、その項目内容から、内的基準に基づくことなく意思決定する傾向と考えられる。したがって、「被影響性」（岩城, 2012）の惰性的側面は相互独立的自己観と負の関連が示されるだろう（仮説3）。

制御焦点理論（Higgins, 1997）では促進焦点と予防焦点の2種類の自己制御システムから目標志向性を捉える。促進焦点は肯定的な結果や成功等の利得を求めようとする利得接近志向性を基盤とし、「どうやったら自分の目標や希望をかなえられるか、よく想像することがある」といった項目から測定される。「主体性」（岩城, 2012）と促進焦点は共に内的基準に基づく認知的な傾向であるため、これらの間には正の関連が示されるだろう（仮説4）。また、促進焦点の基盤には肯定的な自己評価があるため（尾崎・唐沢, 2011）、「主体性」（岩城, 2012）も同様に自尊感情と正の関連が示されるだろう（仮説5）。

予防焦点は否定的な結果や失敗等の損失を避けようとする損失回避志向性を基盤とする自己制御システムであり、「私はたいてい、悪い出来事を避けることに意識を集中している」といった項目から測定される（尾崎・唐沢, 2011）。現代青年は周囲からの排除を予防するために依存的な行動や惰性的な同調を行いやすいため（岡田, 2012; 杉原, 2001）、「被影響性」（岩城, 2012）の依存的側面と惰性的側面はいずれも予防焦点と正の関連が示されるだろう（仮説6）。また、依存的な意思決定スタイルは自尊感情と負の関連が示されているため（Thunholm, 2004）、「被影響性」（岩城, 2012）の依存的側面も自尊感情と負の関連が示されるだろう（仮説7）。一方、「被影響性」（岩城, 2012）の惰性的側面は内的基準に基づくことなく意思決定する傾向と想定したため、自尊感情のような肯定的な自己評価と関連するかは定かではな

い。したがって、惰性的側面と自尊感情との関連は探索的に検討する。

研究1

目的

主体性・被影響性尺度（岩城, 2012）の因子構造の検討、及び相互独立的—相互協調的自己観との関連の検討を目的とする。

方法

調査対象者・調査時期 2016年の1月と4月に国立大学理系学部に所属する大学生880名を対象に質問紙調査を行い、尺度の回答に欠損が含まれなかった850名（男性691名、女性154名、不明5名；平均年齢19.29歳、 $SD = 1.01$ ）を有効回答とした。ただし、性別による偏りが大きかったため、結果の一般化可能性を考慮し、年齢と性別で対応付けたデータセットを作成した。人数の少なかった女性の年齢に対応付けられる男性のデータをランダムに抽出し、性別と年齢で対応付けられなかったデータを除外した結果、250名（男女各125名；平均年齢19.22歳、 $SD = 1.04$ ）を分析対象とした。なお、妥当性の検討は2016年1月に調査を実施した90名（男性61名、女性29名；平均年齢19.23歳、 $SD = 0.69$ ）に対してのみ行った。

尺度構成 質問紙は、性別や年齢に加えて、主体性・被影響性尺度（岩城, 2012）、相互独立的—相互協調的自己観尺度（高田, 2000）、University Personality Inventory 16T-Graded Response model（UPI16T-GR；岩淵・加藤, 2018）、友人満足感尺度（加藤, 2001）から構成した。ただし、本研究ではUPI16T-GRと友人満足感は分析に使用しなかった。

意思決定スタイル 意思決定スタイルの測定のために主体性・被影響性尺度（岩城, 2012）を用いた。この尺度は個人の主体的・促進的な志向性を

表す「主体性」10項目と、自らの言動に対する周囲からの影響の受けやすさを表す「被影響性」12項目の2因子22項目から構成される。ただし、大学生は一般に学級という集団を持たないため、学級場面に限定した項目(例:クラスでものを決めるのに、友だちが賛成すると、つい、つられて賛成してしまう;主体性3項目,被影響性4項目)を削除し、残り15項目(主体性7項目,被影響性8項目)を使用した。評定は「全くあてはまらない(1点)」から「よくあてはまる(5点)」の5件法であった。

相互独立的一相互協調的自己観 自己の内的基準を重視する「相互独立的自己観」10項目(例:常に自分自身の意見を持つようにしている)と、周囲の意向を重視する「相互協調的自己観」10項目(例:人が自分をどう思っているかを気にする)の2因子から構成される相互独立的一相互協調的自己観尺度(高田,2000)20項目を用いた。評定は「全くあてはまらない(1点)」から「ぴったりあてはまる(7点)」の7件法であった。

倫理的配慮 著者及び調査対象者の所属機関に倫理委員会が未設置だったため、日本心理学会(2011)の倫理規定に即して以下の倫理的配慮を行った。質問紙には、回答しないことや回答を中断したことによる不利益はないこと、個人の回答は公表されないが統計的な分析結果は研究目的で使用・公表すること、回収した質問紙は著者の所属機関の責任の下で管理され、10年の保管期間の後に破砕処理されることを明記し、自由意思による調査協力を求めた。したがって、質問紙への回答により調査に同意したと見なした。上記の倫理的配慮に加え、研究目的、研究時期、研究手法等を調査対象者の所属機関に説明し、倫理的な問題について審議された上で調査の承認が得られた。

統計ソフト 統計的分析には R_{3.4.3}を用いた。

結果

主体性・被影響性尺度(岩城,2012)の項目に天井・床効果が確認されなかったため、全15項目について探索的因子分析(最尤法・オブリン回転)を行っ

Table1 青年期用意思決定スタイル尺度の探索的因子分析 (n = 250)

項目	(a)	(b)	(c)	<i>h</i> ²	<i>M</i>	<i>SD</i>
(a) 主体的選択 (α=.83, M=3.78, SD=0.60)						
12 自分のことは、自分で何とかしようと思う (A)	.73	.17	-.14	.53	3.98	0.80
10 自分で考えて、自分のやるべきことを見つけようとする (A)	.72	-.15	.09	.57	3.68	0.86
8 何か問題が起こったとき、自分で何とかする方法を考えようとする (A)	.72	-.02	-.03	.54	3.86	0.77
14 これはやって良いか悪いかを、自分で考えて行動しようとしている (A)	.69	.04	-.04	.47	3.94	0.73
6 自分の言ったことを自分できちんと理解しようとしている (A)	.61	-.08	.09	.39	3.82	0.79
4 迷ったときに人に相談はするけれど、最後には自分で決めようとする (A)	.52	-.04	.11	.27	3.40	1.03
(b) 衝突回避 (α=.83, M=2.84, SD=0.90)						
13 自分で出したよい意見でも、周囲に反対されると、理由をよく調べないで、すぐ、取り消してしまう (I)	-.02	.83	-.03	.67	2.61	1.03
9 他の人から反対されるとすぐに自分の意見を変えてしまう (I)	-.03	.77	.05	.65	2.74	1.00
11 自分なりの考えを持っていても、それを反対されるとすぐに自信がなくなってしまう (I)	.04	.65	.17	.55	3.16	1.09
(c) 表面的同調 (α=.78, M=2.89, SD=0.90)						
1 まわりの友だちが自分と同じことをしていないと、心配になる (I)	-.02	-.02	.79	.62	3.10	1.14
15 活動するとき、友だちと一緒にでないと、心配になる (I)	.03	.07	.69	.52	2.90	1.09
5 何も考えず、つい、友人がやっていることの真似ばかりをしようとする (I)	-.07	.19	.57	.50	2.66	1.01
因子間相関	(a)	-	-.24	-.17		
	(b)		-	.51		
	(c)			-		
削除された項目						
2 何のために勉強をするのかを、考えながら勉強しようとする (A)					3.96	0.88
3 自分が何をしたいかを尋ねられると、つい、何も考えずに、「何でもいい」と答えようとする (I)					3.17	1.09
7 自分のことを決めるとき、人に相談して決めてもらおうとする (I)					2.66	1.04

注) (A): 原尺度の「主体性」に該当する項目; (I): 原尺度の「被影響性」に該当する項目

た。スクリープロットと Minimum Average Partial (MAP) 基準では2因子が、ガットマン基準、Bayesian Information Criterion (BIC) 基準、平行分析では3因子が適当であった。因子数の決定基準が多かった3因子構造を仮定し、因子負荷量が.40に満たない3項目を削除したところ、許容できる内の整合性が示された (Table1; $\alpha_s = .78 - .83$)。

補足的に、性別と年齢で対応付ける前の調査対象者全体 ($n = 850$) でも探索的因子分析を行ったところ、対応付けた後の分析対象者 ($n = 250$) と同様の結果が示された。また、調査対象者全体 ($n = 850$) で原尺度 (岩城, 2012) の2因子構造と探索的因子分析で得られた3因子構造の確認的因子分析を行ったところ、3因子構造の適合度の方が良好であった (2因子構造 / 3因子構造: AIC = 24955.88 / 24732.93, BIC = 25130.57 / 24917.06, CFI = .90 / .97, RMSEA = .09 / .05, SRMR = .05 / .04)。したがって、研究1では3因子構造を採用した。

第1因子は原尺度において「主体性」に該当する項目から構成されたが、本研究では意思決定スタイルということを考慮して「主体的選択」と命名した。第2因子は原尺度の「被影響性」のうち、周囲の意向に追従する項目から構成されたため「衝突回避」と命名した。第3因子は原尺度の「被影響性」のうち、不安から深く考えずに同調的な意思決定を行う項目によって構成されたため「表面的同調」と命名した (Table1)。以下では本尺度を「青年期用意思決定スタイル尺度」とする。

次に妥当性の検討を行った。各意思決定スタイル

は部分的に構成概念に重なりを持つため (Thunholm, 2004), 相互に統制することで各スタイルの独自成分と他変数との関連を検討することができる。したがって、青年期用意思決定スタイル尺度の下位尺度間で統制をかけ、相互独立的一相互協調的自己観との偏相関分析を行った (Table2)。ここで分析に用いたデータは2016年1月に調査を行った対象者 ($n = 90$) のみであり、探索的因子分析を行った分析対象者 ($n = 250$) と比較して「表面的同調」の内的整合性が低く ($\alpha = .69$), また、主体的選択の平均値が高く、衝突回避と表面的同調の平均値が低かった (Table1, Table2)。しかし、想定する母集団は同一であったため、妥当性の検討は可能と判断した。主体的選択は相互独立的自己観と正の偏相関 ($p_r = .42, p < .001$) が示され、仮説1は支持された。衝突回避は相互協調的自己観と正の偏相関 ($p_r = .42, p < .001$) が示され、仮説2は支持された。表面的同調は相互独立的自己観と負の偏相関 ($p_r = -.27, p = .01$) が示され、仮説3は支持された。

考察

研究1では主体性・被影響性尺度 (岩城, 2012) の因子構造及び内的整合性と、相互独立的一相互協調的自己観との関連を検討した。探索的因子分析と確認的因子分析から3因子構造が採用され、許容できる内の整合性が示された。また、相互独立的一相互協調的自己観との偏相関分析から仮説1から仮説3は全て支持され、主体的選択は自発的

Table2 意思決定スタイルと相互独立的一相互協調的自己観の記述統計量及び相関・偏相関分析 ($n=90$)

	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>a</i>	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)
(a) 主体的選択	4.09	0.61	.81		-.34 **	-.51 ***	.61 ***	-.14
(b) 衝突回避	2.49	0.95	.84			.34 **	-.52 ***	.46 ***
(c) 表面的同調	2.47	0.89	.69				-.53 ***	.25 *
(d) 相互独立的自己観	4.49	0.87	.82	.42 ***	-.38 ***	-.27 *		-.37 ***
(e) 相互協調的自己観	4.83	0.73	.73	.08	.42 ***	.14		

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

注) 相関行列の右上は相関分析の、左下は偏相関分析の結果を意味する。

スタイルの、衝突回避は依存的スタイルの、表面的同調は惰性的スタイルの測定尺度として妥当性が確認された。ただし、単純相関では表面的同調と相互協調的自己観の間に正の関連が示されたため、他の意思決定スタイルで統制しない表面的同調は依存的スタイルの性質も含むと考えられる。

研究2

目的

研究1に引き続き、主体性・被影響性尺度(岩城, 2012)の因子構造及び内的整合性の検討と、制御焦点や自尊感情との関連から意思決定スタイルの測定尺度としての妥当性を検討する。

方法

調査対象者・調査時期 2017年4月に国立大学理系学部に所属する大学生176名を対象に質問紙調査を実施し、尺度の回答に欠損が含まれなかった165名(男性112名, 女性51名, 不明2名; 平均年齢19.90歳, $SD = 0.74$)を分析対象とした。

尺度構成 質問紙は、性別や年齢に加えて、主体性・被影響性尺度(岩城, 2012)、促進予防焦点尺度邦訳版(尾崎・唐沢, 2011)、Rosenberg自尊感情尺度(山本ら, 1982)から構成した。

意思決定スタイル 意思決定スタイルの測定のため、主体性・被影響性尺度(岩城, 2012)のうち、研究1と同じ15項目5件法を使用した。

制御焦点 促進焦点の基盤となる「利得接近志向性」8項目(例: どうやったら自分の目標や希望をかなえられるか, よく想像することがある), 予防焦点の基盤となる「損失回避志向性」8項目(例: 私はたいてい, 悪い出来事を避けることに意識を集中している)の2因子から構成される促進予防焦点尺度邦訳版(尾崎・唐沢, 2011)16項目を用いた。評定は「強くそう思わない(1点)」から「強くそう思う(4点)」の4件法であった。

自尊感情 肯定的な自己評価を測定するためにRosenberg自尊感情尺度(山本ら, 1982)1因子10項目を用いた(例: 少なくとも人並みには, 価値のある人間である)。評定は「強くそう思わない(1点)」から「強くそう思う(4点)」の4件法であった。

倫理的配慮 研究1と同じ倫理的配慮を行った。

統計ソフト 分析にはR_{3.4.3}を用いた。

結果

研究1と同様に主体性・被影響性尺度(岩城, 2012)の探索的因子分析(最尤法, オブリミン回転)を行った。MAP基準では2因子が, スクリープロット, ガットマン基準, BIC基準, 平行分析では3因子が適当であったため, 3因子構造を仮定した。因子負荷量が.40に満たない項目を削除した結果, 研究1と同様の因子パターンが示され, 許容できる内的整合性が示された(Table3; $\alpha s = .75 - .79$)。また, 2因子構造と3因子構造を仮定した確認的因子分析でモデル比較を行った結果, 3因子構造の適合度の方が良好であった(2因子構造 / 3因子構造: AIC = 4670.80 / 4619.55, BIC = 4785.72 / 4740.68, CFI = .83 / .93, RMSEA = .10 / .07, SRMR = .08 / .06)。したがって, 研究2でも3因子構造を採用した。

次に, 研究1と同じく意思決定スタイル間で統制をかけ, 青年期用意思決定スタイル尺度と制御焦点及び自尊感情との偏相関分析を行った(Table3)。主体的選択は利得接近志向性や自尊感情と正の偏相関が示され($pr_s = .45, .31, p_s < .001$), 仮説4と仮説5は支持された。衝突回避と表面的同調は損失回避志向性と正の偏相関が示され($pr_s = .22, .23, p_s < .01$), 仮説6は支持された。衝突回避は自尊感情と負の偏相関が示され($pr = -.25, p = .001$), 仮説7は支持された。表面的同調と自尊感情の間には有意な偏相関が示されなかった($pr = -.14, p = .07$)。

Table3 意思決定スタイル、制御焦点、自尊感情の記述統計量及び相関・偏相関係数 (n = 165)

	M	SD	<i>a</i>	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(f)
(a) 主体的選択	3.88	0.54	.79		-.42 ***	-.24 **	.53 ***	-.02	.44 ***
(b) 衝突回避	2.67	0.80	.75			.44 ***	-.33 ***	.29 ***	-.45 ***
(c) 表面的同調	2.88	0.83	.75				-.17 *	.32 ***	-.32 ***
(d) 利得接近志向性	2.71	0.49	.83	.45 ***	-.12	.00		.02	.38 ***
(e) 損失回避志向性	2.76	0.43	.71	.13	.22 **	.23 **			-.48 ***
(f) 自尊感情	2.48	0.49	.85	.31 ***	.25 ***	-.14			

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

注) 相関行列の右上は相関分析の、左下は偏相関分析の結果を意味する。

考察

研究1と同様に研究2でも主体性・被影響性尺度(岩城, 2012)の因子構造及び内的整合性を検討し、制御焦点及び自尊感情との関連から妥当性を検討した。探索的因子分析と確認的因子分析から3因子構造の再現性が確認され、許容できる内的整合性が示された。また、制御焦点や自尊感情との偏相関分析から仮説4から仮説7は全て支持され、主体的選択は自発的スタイルを、衝突回避は依存的スタイルを、表面的同調は惰性的スタイルを測定する尺度として妥当性が検証された。ただし、単純相関では衝突回避と表面的同調が制御焦点や自尊感情と同様の関連を示したため、他の意思決定スタイルで統制しない表面的同調は依存的スタイルの性質も含むと考えられる。

総合考察

本研究の目的は、主体性・被影響性尺度(岩城, 2012)を、自発的、依存的、惰性的な意思決定スタイルの測定尺度に再構成可能か検討することであった。研究1と研究2で独立に探索的因子分析及び確認的因子分析を行ったところ、3因子構造の再現性が確認された。また、一部の調査対象者において表面的同調の内的整合性が低かったものの、概ね許容できる内的整合性が示されたことから、2因子構造であった主体性・被影響性尺度(岩城, 2012)を3因子構造の青年期用意思決定スタイル尺度として再構成することは可能と考えられ

る。

また、相互独立的一相互協調的自己観(高田, 2000)や制御焦点(尾崎・唐沢, 2011)、自尊感情(山本ら, 1982)との偏相関分析を行ったところ、いずれの仮説も支持された。したがって、主体的選択は内的基準を基に意思決定する自発的スタイルの、衝突回避は周囲の意向に追従して意思決定する依存的スタイルの、表面的同調は深く考えずに同調する惰性的スタイルの測定尺度として妥当性を有すると考えられる。

ただし、単純相関では表面的同調と衝突回避が相互独立的一相互協調的自己観や制御焦点、自尊感情と同じ方向の関連を示したため、他の意思決定スタイルで統制しない表面的同調の測定概念には惰性的スタイルと依存的スタイルが混在すると考えられる。他の意思決定スタイルによる統制の有無で表面的同調の測定概念が変動することは本尺度の課題であるが、周囲から排除されないことを重視する現代青年の特徴(岡田, 2012; 杉原, 2001)に即して、自発的、依存的、惰性的スタイルの測定方法を示すことはできたと言えよう。今後、現代青年における惰性的スタイルと依存的スタイルの共通性と独自性について検討を進めつつ、現代青年に即した心理的支援モデルを構築することが求められる。

本研究の限界と今後の展望 本研究では、主体性・被影響性尺度(岩城, 2012)を自発的、依存的、惰性的な意思決定スタイルの測定尺度に再構成した。本尺度は現代青年の特徴を踏まえた点で意思

決定スタイル研究における独自性を有するが、それ故に「自信のなさ」や「不安」といった表現が項目内容に含まれた。従来の意思決定スタイル尺度は行動面を反映した項目を中心に構成されるため、意思決定スタイルの構成概念をどこまで広げられるかについて引き続き議論する必要がある。また、本研究の調査対象者は主に大学1-2年生であり、青年期全体を対象に信頼性や妥当性を検証するには至っていない。今後は中高生や大学院生まで調査範囲を広げることで、本尺度の適用範囲を検討すると共に、現代青年の意思決定スタイルの発達的变化を明らかにすることが求められる。

付記

本研究は第36回日本学生相談学会、第69回東北心理学会、東北大学大学院教育学研究科に特定研究論文Iとして提出した内容の一部に加筆修正を加えたものである。ご指導いただいた加藤道代名誉教授(東北大学大学院)、貴重なコメントをいただいた査読者に深く感謝申し上げます。

引用文献

- Baiocco, R., Laghi, F., & D'Alessio, M. (2009). Decision-making style among adolescents: Relationship with sensation seeking and locus of control. *Journal of Adolescence*, **32**, 963-976. doi: 10.1016/j.adolescence.2008.08.003.
- Bavolar, J., & Bacikova-Sleskova, M. (2018). Do decision-making styles help explain health-risk behavior among university students in addition to personality factors? *Studia Psychologica*, **60**, 71-83. doi: 10.21909/sp.2018.02.753.
- 中央教育審議会(2018). 今後の高等教育の将来像の提示に向けた中間まとめ Retrieved from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1406578.htm (2020年8月9日).
- Coscarelli, W. C. (1983). Development of a Decision-Making Inventory to Assess Johnson's Decision-Making Styles. *Measurement and Evaluation in Guidance*, **16**, 149-160. doi: 10.1080/00256307.1983.12022348.
- Erikson, E. H. (1968). *Identity: youth and crisis*. New York: W. W. Norton.
- Filippello, P., Sorrenti, L., Cuzzocrea, F., Nuzzaci, A., & Larcan, R. (2014). The subtle sound of learning: What are the roles of the self-esteem, decision-making, and social skills in adolescents' academic performance? *US-China Education Review B*, **4**, 73-85.
- Hamilton, K., Shih, S. I., & Mohammed, S. (2016). The Development and validation of the rational and intuitive decision styles scale. *Journal of Personality Assessment*, **98**, 523-535. doi: 10.1080/00223891.2015.1132426.
- Higgins, E. T. (1997). Beyond pleasure and pain. *American Psychologist*, **52**, 1280-1300. doi: 10.1093/acprofoso/9780199765829.001.0001.
- 岩渕将士・加藤道代(2018). UPI 短縮版における多段階評定化の試み—UPI16T-GRの信頼性・妥当性の検討—東北大学大学院教育学研究科研究年報, **67**, 1-18.
- 岩城聡美(2012). 中学生の進路選択プロセス—主体性・被影響性尺度の観点から—東北大学大学院教育学研究科 修士論文.
- Janis, I. L., & Mann, L. (1977). *Decision Making: A psychological analysis of conflict, choice, and commitment*. New York: Free Press.
- Johnson, R. H. (1978). Individual Styles of Decision Making: A Theoretical Model for Counseling. *The Personnel and Guidance Journal*, **56**, 530-536. doi: 10.1002/j.2164-4918.1978.tb05305.x.

- Kagan, H., & Cohen, J. (1990). Cultural Adjustment of International Students. *Psychological Science*, **1**, 133–137. doi: 10.1111/j.1467-9280.1990.tb00082.x.
- 加藤 司 (2001). 対人ストレス過程の検証 教育心理学研究, **49**, 295–304. doi: 10.5926/jjep1953.49.3_295.
- Mann, L., Burnett, P., Radford, M., & Ford, S. (1997). The Melbourne decision making questionnaire: An instrument for measuring patterns for coping with decisional conflict. *Journal of Behavioral Decision Making*, **10**, 1–19. doi: 10.1002/ (SICI) 1099-0771 (199703) 10:1<1::AID-BDM242>3.0.CO;2-X.
- 溝上慎一 (2008). 自己形成の心理学—他者の森をかけ抜けて自己になる—世界思想社.
- 日本心理学会 (2011). 公益社団法人日本心理学会倫理規定 第3版.
- 岡田努 (2012). 現代青年の友人関係に関する新たな尺度の作成—傷つけ合うことを回避する傾向を中心として—金沢大学人間科学系研究紀要, **4**, 19–34.
- 尾崎由佳・唐沢かおり (2011). 自己に対する評価と接近回避志向の関係性—制御焦点理論に基づく検討—心理学研究, **82**, 450–458. doi: 10.4992/jjpsy. 82. 450.
- Radford, M. H. B., Mann, L., Ohta, Y., & Nakane, Y. (1993). Differences between Australian and Japanese students in decisional self-esteem, decisional stress, and coping styles. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **24**, 284–297. doi: 10.1177/0022022193243002.
- Scott, S. G., & Bruce, R. A. (1995). Decision-Making Style: The Development and Assessment of a New Measure. *Educational and Psychological Measurement*, **55**, 818–831. doi: 10.1177/0013164495055005017.
- 杉原保史 (2001). 過剰適応的な青年におけるアイデンティティ発達過程への理解と援助について 心理臨床学研究, **19**, 266–277.
- 高田利武 (2000). 相互独立的—相互協調的自己観尺度に就いて 奈良大学総合研究所所報, **8**, 145–163.
- Thunholm, P. (2004). Decision-making style: Habit, style or both? *Personality and Individual Differences*, **36**, 931–944. doi: 10.1016/S0191-8869 (03) 00162-4.
- Wood, N. L., & Highhouse, S. (2014). Do self-reported decision styles relate with others' impressions of decision quality? *Personality and Individual Differences*, **70**, 224–228. doi: 10.1016/j.paid.2014.06.036.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64–68. doi: 10.5926/jjep1953.30.1_64.

